

第1・2・3学年 総合的な学習の時間 学習指導案

福岡市立小呂中学校

校長 枝広 隆志

1 単元名 「小呂島の未来と私たち」

2 単元の目標

- 小呂島の産業、人口の推移等の現状について理解し、全国離島学校サミット参加校の中学生に伝わるようプレゼンテーションソフトにまとめることができる。 (知識及び技能)
- これまでの学習を振り返り小呂島の課題を見つめ、小呂島での現在の取組や他の島での先行事例から、小呂島が持続的に発展するための方途とそのために自らがすることを考え、その内容を小呂島の住民代表や全国離島学校サミット参加校の中学生へ効果的に伝えることができる。また、全国離島学校サミット参加校の発表を聞き、小呂島との共通点や相違点を見いだすことができる。 (思考力・判断力・表現力等)
- 小呂島が今後も幸せに暮らしていける島にしていきたいとの目的意識をもち、意欲的に他の島の事例を調べたり、島の一員として自分のできることを考え実践したりする行動を取ることができる。 (主体的に学習に取り組む態度)

3 単元について

(1) 教材観

本校生徒は、これまでに小呂島の漁業を営む地域住民をゲストティーチャーとして迎え、その話や家族、島に在住する親戚等の話から感じ取った小呂島の課題を探求する学習を行ってきた。

本校の位置する小呂島では、1645年(正保2年)の移住開始から漁業を主産業とし、豊かな海洋資源を背景に発展してきたが、近年の気候変動等により漁獲高が減少するなど漁業の不振、それに伴う人口の急激な減少、高齢化の加速により、従来の産業構造のままでは島が立ち行かなくなる大きな危機を迎えている。また、最盛期で62名であった小呂小中学校の児童生徒数は、現在小学生7名、中学生4名、児童生徒合計11名まで減少し、学習活動の展開にも支障をきたしている状況がある。その中で、小呂島では漁獲量を増やすための新規の漁法への挑戦、魚介類の加工・流通等6次産業化の模索、環境保全のための活動、観光業などの産業の多角化等、島の生き残りをかけた取組を始めたところである。

この題材は、生徒一人ひとりが小呂島の住民のひとりであり、将来の島の担い手の主体的一員であるという前提に立ち、島の将来を考え、その発展のためにできることを身近なことから実際の行動につなげていくという題材である。そのために、これまで学習したり、実際の生活の中で感じ取ったりした島のよさや魅力を基盤に、島の持続的な発展のためにアイデアを出し、できることを考えていくものである。その過程において、離島振興に詳しいゲストティーチャーを招聘し、自分たちのアイデアをぶつけ考えを交換するとともに、全国に約400ある有人離島で行われている、それぞれの島の発展のための取組を知ることにより、小呂島の取組をより効果的にする方法を考える。その内容は、「第2回全国離島学校サミット2023」の場で、全国各地の離島に暮らす中学生と交流し、より深めるとともに、小呂島住民代表に発表し決意を表明することにより、島の未来を担う一住民として、小呂島の未来を創る主体として行動する意識をもち、自らのできることを実践する力をつける格好の題材である。

(2) 生徒観

本校は超小規模校であり、中学生は1年生1名、2年生2名、3年生1名の計4名しか在籍していない。全員が島で生まれ育ち、幼いころからきょうだい同然に過ごしてきたため、生徒同士のコミュニケーションは円滑であるが、固定された小さな集団での生活に慣れているため、新たな人間関係を構築したり、島外の人とのコミュニケーションをしたりする経験は乏しい。本単元は、全国離島学校サミットの間を通して、小呂島の現状や自らの考えを伝えたり、他の島と小呂島の現状を比較し共通点や相違点に気づき考えを深めたりといった思考力・表現力の伸長を図ることができる。

また、本校は施設一体型の小中併設校であり、同一校長のもと、小学校の時から系統的に小呂島についての学習を行ってきた。小学生の間は、主に島のよさに焦点を当て、郷土に誇りをもてる児童の育成に重点を置いてきた。中学生の発達段階として、敢えて島の課題にも目を向け、それを解決していく主体となっていく思いを強くすることを目指している。

(3) 指導観

本単元の学習に当たっては、これまで学習してきた島の課題を再認識するところから始めたい。昨年度は、漁業に携わる小呂島の住民をゲストティーチャーに迎え島の課題について学習を行った。漁獲量の推移、獲れる魚種の変化等、島の漁業を通して実際に肌で感じる島の環境の変化について知識を深めた。また、人口の減少、高齢化などの問題についても改めて考える機会となった。

小呂島が持続可能な島であり続けるためには、その課題に向き合っていく必要がある。小呂島で実際に行っている取組について調べる。島民への聞き取り等によって、どのような取組を行っているのかを調べさせる。温暖化による藻場の喪失とその再生事業、加工産業への取組や新規の漁法の採用、また観光産業への参入など、島として生き残りをかけて取り組んでいることに行きつけるよう支援したい。現在の取組を参考に生徒自身が島の振興のアイデアを考えさせたい。これまで学習した島全体で取り組みを参考とすることはもちろんだが、生徒自身が島内での活動の中で感じ取った身近な問題からもヒントを得て、具体的に島民と共働して取り組めることに目を向けさせたい。また、全国に点在する有人離島の多くは、少子高齢化や人口減少等、小呂島と共通する課題をもつ島も少なくない。これらの島では、その地域住民を中心に課題解決のための様々な取組を行っており、その中には小呂島の未来を創るために参考となる事例も少なくない。全国の離島振興のための NPO 法人に所属し、離島振興に詳しいゲストティーチャーを招き自らのアイデアを聞いてもらうとともに、他の島の先行事例等を聞き、考えを深め、より豊かな小呂島の振興のアイデアをまとめさせる。

その学習内容やそれぞれの思いを、小呂島の住民代表に聞いてもらい対話する場を設ける。住民に考えを聞いてもらい、意見を交換することより、生徒一人ひとりが島の一住民として持続可能な小呂島を創っていく主体となって島民とともに活動していく決意をもたせる。

住民代表との話し合いの場で深められた思いは、プレゼンテーション等でまとめ、全国4つの島の中学校が参加する「第2回全国離島学校サミット2023」で発表する。すでに、交流活動等で顔見知りになっている全国の離島学校の生徒に、分かりやすく小呂島の現状と取組、自らのアイデアを伝えられるよう、資料の作成、発表の準備を進める。「全国離島学校サミット」では、小呂島の現状を分かりやすく伝えるとともに、同じ離島でありながら島の規模、産業構造、気候風土も違う他の島の発表を聞き、意見交流することによって、課題は様々ではあるが、それぞれ自分の島を愛し、誇りに思い、それぞれの課題を解決しようと

する姿に触れることで、多様性を尊重する姿勢を身に着けるとともに、その思いの共通点に気づかせたい。結果として、授業としての「全国離島学校サミット」終了後も参加校の生徒と交流を続け島の将来について意見を交わしあう、環境を保全するため小呂島の清掃活動に自主的に参加する、小呂島の魅力を様々な形で島外に発信するなどの行動を自主的に行い、持続可能な島を創る主体となり、島の未来に明るい兆しを感じられるよう支援したい。

(4) ESD との関連

・本学習で働かせる ESD の視点

- ・ 相互性…海の豊かさを基盤とした漁業と気候変動問題等の自然環境には密接な関連性がある。また産業の多様性と経済問題、人口の流出等にも深い相互性があり、課題を解決するためには多角的な取組が必要であること
- ・ 有限性…これまで当たり前のように思っていたことた小呂島の存在は、先人たちの普段の努力によりもたらされたものだということを再認識する。そして、その努力は今後も続けていかなければ、島の将来はないこと
- ・ 責任性…小呂島が将来にわたって住み続けられる島であるためには、その島の主体である自分自身が行動を起こさなければならないこと
- ・ 多様性…全国には多くの離島があり、類似性も多いが、その課題は様々であること。その解決のために多くの人が、多くの方法で取り組んでいること

・本学習を通して育てたい ESD の資質・能力

- ・ 批判的に考える力（クリティカル・シンキング）
自分たちが海の豊かさを損なう行動をとっていなかったか、環境保全の力になれていたかを見つめ直す
- ・ 多面的・総合的に考える力（システム・シンキング）
海の自然環境を守りながら産業を守り、生活を豊かにしていくことを成し遂げる方法について、またそのために今できることを考える
- ・ コミュニケーションを行う力
「第1回全国離島学校サミット」での発表や意見交流を通して、自分の考えをつくりあげる

・本学習で変容を促す ESD の価値観

- ・ 世代間の公正
小呂島を創り上げた先人に感謝するとともに、より豊かな島を次の世代に引き継いでいく努力をすることが大切である
- ・ 自然環境や生態系保全を重視する
海の豊かさは自然環境の保全なしでは守れないことを知り、環境の負荷を取り除くとともに、「豊かな海」を守るための行動を起こす
- ・ 幸福感を大切に
自分や家族の育った小呂島に感謝するとともに、島で暮らす喜びを再認識する

・達成が期待される SDG s

- 4 教育
- 8 経済成長と雇用
- 11 まちづくり
- 13 気候変動
- 14 海洋資源

4 単元の評価規準

(ア)知識及び技能	(イ)思考力・判断力・表現力等	(ウ)主体的に学習に取り組む態度
<p>①小呂島の産業、人口等の現状について理解している。</p> <p>②島民代表に伝わるようプレゼンテーションソフトにまとめることができる。</p>	<p>①これまでの学習内容やゲストティーチャーの話から、小呂島が持続可能な島であり続けるためのアイデアをもつことができる。</p> <p>②小呂島の課題やその解決のための取組を、全国離島学校サミット参加校の中学生へ効果的に伝えることができる。</p> <p>③全国離島学校サミット参加校の発表を聞き、小呂島との共通点や相違点を見いだすことができる。</p>	<p>①小呂島を今後も幸せに暮らしていける島にしていきたいとの目的意識をもち、意欲的に学習に取り組むことができる。</p> <p>②島の一員として自分のできることを考え実践することができる。</p>

5 単元の指導計画（全10時間）

学習活動	○学習への支援	○評価・備考
<p>1 小呂島の現状や課題について、これまでの学習を振り返り、島の課題を確認し、今後の活動の見通しをつかむ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・獲れる魚の業種が変わるとともに、漁獲量が減少している。 ・小呂島近海の藻場が喪失し、海中の環境が激変している。 ・漁師の高齢化が進むとともに、島を離れる決意をした若手漁師が増えて、人口減少高齢化が進んでいる。 	<p>○ 昨年の「全国離島学校サミット」の録画を視聴させ、小呂島の取組だけでなく他の島の取組についても思い出させる。</p>	<p>ア① (知・技) ウ① (主体的)</p>
<p>2 小呂島の抱える課題を解決するための取組について、できる方法を考える。</p> <p>3 それぞれのアイデアを、離島振興に携わっているゲストティーチャーに話し意見を交換するとともに、他の島での事例を聞き、考えを深める。</p>	<p>○ これまで小呂島でやっている取組を踏まえ、自由な発想でアイデアを出させる。</p> <p>○ 事前にゲストティーチャーと綿密に打ち合わせを行い、先行事例について提示の準備をお願いする。</p> <p>○ 聞き取りの際のマナー指導などを行い、円滑に聞き取りができるよう配慮する。</p>	<p>イ① (思判表)</p>
<p>4 考えた内容をプレゼンテーションソフト等でまとめ、島民の代表に話し意見交換を行う。</p>	<p>○ 身近な体験をもとに具体的な取組を考えさせ、その内容を単に島民代表に伝えるだけでなく、ともに共働して島の未来を創っていく決意を表明し実際の行動につなげるよう支援する。</p>	<p>ア② (知・技)</p>
<p>5 「全国離島学校サミット」で、小呂島の現状、取組を発表するとともに、他の島での取り組みについて聞く。</p> <p>6 活動を振り返り、これから小呂島のために自分たちができることについて考える。</p>	<p>○ 相手に伝わりやすい声、話し方。表情などに留意させる。</p> <p>○ 小呂島と他の島の共通点や相違点に着目させ、比較しながら聞かせる。</p> <p>○ 各自が島の住民の一員であること、未来の担い手の主体であることの思いを新たにできるよう配慮する。</p> <p>○ 自分のできる行動について具体的に考えさせ、それを実践に移せるよう配慮する。</p>	<p>イ② (思判表) イ③ (思判表) ウ② (主体的)</p>

6 成果と課題

【成果】

- 普段の生活の一部である小呂島について、その現状や課題を再認識することにより、小呂島が今後も有人島として存続できる島であってほしいとの思いを強くすることができた。そして、小呂島が有人島であるためには、現状のままでは難しく、その課題を解決していくのは未来の

島の創り手・担い手である自分たちであるとの思いを強くすることができた。また、小呂島の主体である自分自身が何をできるかを考え、島の代表者に決意を伝え、共に島の未来のために共働していこう訴えかけることができた。このことにより、生徒一人ひとりの島への思いが小さな行動となって表れる場面が多く見られるようになった。

- 考えをまとめ発表する機会を多くもつことができた。島代表者との意見交流、離島振興に詳しい NPO 法人の方、そして同世代の離島学校サミットで出会った仲間たちへのプレゼンテーション、意見交流等を通して、多くの表現の機会を得ることができたし、その過程で思考力や判断力を磨くこともできた。これは、各学年多くても 2 名しかいない本校の生徒にとってはハードルの高いものであったが、それを乗り越える努力をすることにより自信にもつながった。
- 中学校 1 年生から 3 年生まで合同での取組としたため、学習を開始した段階では、学年によりこれまでの経験値や思い等にも差があった。下級生にとっては、上級生の言動や思いに直接触れることにより、その考えを深めることができたとともに、上級生にとっても卒業後進学等で島を離れる前に自分たちの思いを後輩に伝えようという気持ちが見られ、それが小呂小中学校の伝統となっていく過程であると感じた。
- 出会いの場を多く設定することができた。島代表者との意見交流では、狭い島の中、普段から顔見知りの関係ではあるものの、深く意見交流をした経験のない人たちと真剣に議論し新たな側面を見つけることができた。また、離島振興に詳しい NPO 法人の方と話すことにより、多面的なもの見方、考え方を学ぶことができた。さらに、全国の様々な離島で暮らす同世代の仲間たちと出会い、離島で暮らす者同士が分かり合える価値観を共有し友情を深め合うとともに、全国の風土も規模も産業構造も違う島の仲間と語り合うことにより、多様な価値観に寛容な心情も養うことができた。これらの仲間とは、自然災害のニュースが流れた時などお見舞いのメールを送る等好ましい行動も見られている。
- この学習には、校長による主導だけでなく、職員全体として組織的に取り組んだ。教員集団の中にも、在島期間の長短や小呂島への理解の深さ等さまざまな差があり、その思いが一様ではない中、目指す生徒像の共有など、取組の中で職員全体の意識を高めることができた。

【課題】

- 「全国離島学校サミット」の取組自体が持続可能な物でなければならない。この組織は、小呂中学校の校長である私が提唱し、全国の離島学校に呼びかけ賛同する学校で組織したものである。したがって、組織の設立から 2 年間、その事務局は本校が担ってきた。しかし、事務局業務は多岐にわたり、ひとつの学校だけで持続させるのは難しい。私自身が、本校の校長を離任した後もこの組織が持続可能である方法を模索せねばならない。また、設立から 2 年、単なる打ち上げ花火的な行事を行うための組織ではなく、普段から生徒同士顔の見える交流をできる組織であることに重点を置き、参加校は 4 校という枠を設けて活動してきた。そのため、全国の離島学校の中には、この活動に参加したいという意思を示してくれたが、お断りせざるを得ない学校もあった。このことは本意ではなく、本来は参加を希望する離島の学校はすべて受け入れることのできる組織にしたいと願っている。そのためには、学校以外に事務局を置き、参加希望のあるすべての離島学校に門戸を開き、その学校数によっていくつかのブロックを設け活動できる体制を整えたいと考えている。その事務局の開設に、いくつかの財団等に打診を試みているが、いまだ実現の見通しはたっていない。